

## 生活者としての基礎的な能力の育成をめざす

社会とのかかわりへの気付きを生かした学習をめざして

### Aim for nurturing fundamental abilities as a person

Aiming at learning that takes advantage of awareness of the relationship with society

山田 均・中道 奈都美

Hitoshi Yamada, Natsumi Nakamichi

#### 要旨 (Abstract)

1989年（平成元年）に生活科が誕生して間もなく30年を迎える。1971年（昭和46年）の中央教育審議会答申で「低学年においては、知性・情操・意志および身体の総合的な教育訓練により生活および学習の基本的な態度・能力を育てることが大切であるから、これまでの教科の区分にとらわれず、児童の発達段階に即した教育課程の編成のしかたについて再検討する必要がある」<sup>1)</sup>との提示がなされ、そのことを踏まえながら検討が進められ、その成立を見た生活科である。

本稿では「児童が『学習の主人公』になり得る教育機会」が保障されるべき生活科の学習において、教師がどのように支援することで、教科の特性を生かしつつ、その目標、特に「生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う」<sup>2)</sup>ことを達成することにつながるのかということをもとに考察していくこととする。

キーワード：（生活上必要な習慣や技能）（公共施設）（思い・願いの発信）

#### I. はじめに

生活科が誕生して30年が経とうとしている現在においても、「生活科は社会科と理科が合わさったもの」という声を聞くことがある。しかし、生活科は、その誕生の時から「合科」ではなく「総合的に行われる学習」という考え方が強く打ち出されていると考える。「教育課程審議会答申『幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について（答申）』」（1987年）では、「－前略－低学年の児童の心身の発達状況に即した学習指導が展開できるようにする観点から、新教科として生活科を設定し、体験的な学習を通して総合的な指導を一層推進するのが適当である。」<sup>3)</sup>と書かれている。そして、「なお、低学年においては、児童の心身の発達状況を考慮して総合的な指導を行うことが望ましいので、生活科の設定後においても教科の特質に配慮しつつ合科的な指導を一層推進するのが適当である」<sup>3)</sup>とあり、低学年の学習活動全般にわたる総合的な学習の推進とそれまでから取り組まれていた教科をまたがる合科的な指導の推進も記されているからである。

したがって、生活科設置は教科の改廃に止まるものではなく、小学校教育において、低学年児童がより主体的に学習に取り組み、その活動の過程で友達や地域の人々、自然や社会の事物などと対話し、自分の生活について考え

るとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付け、自立への基礎を養っていくことにその意義があると考えられる。これはまさに、今回の学習指導要領改訂の趣旨である「主体的・対話的で深い学び」の考え方と軌を一にするものである。

## Ⅱ. 生活科教育の方向性

次期学習指導要領における生活科の目標は、「教科の特質や目指すところを端的に示したのが教科目標である。生活科の教科目標は次のとおりである。具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」<sup>4)</sup>と教科としての目標の設定について述べたうえで、「(1)活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。(2)身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。(3)身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。」<sup>4)</sup>と示されている。

今回の学習指導要領の改訂にあたって、(1)、(2)、(3)として示している目標は、生活科を通して育成することを目指す資質・能力である。

(1)では「知識及び技能の基礎」について述べている。具体的には、生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気付いたり、何が分かったり、何ができるようになるのかを示している。

(2)では「思考力、判断力、表現力等の基礎」について述べている。具体的には、生活の中で、気付いたこと、できるようになったことを使って、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするかを示している。

(3)では「学びに向かう力、人間性等」について述べている。具体的には、どのような心情、意欲、態度などを育み、よりよい生活を営むかを示している。

このように3つの視点から目標を示しているのは今回の学習指導要領改訂改善の方向性に即したものである。

一方で、これらの目標は児童の生活圏を学習の対象や場とし、それらと直接関わる活動や体験を重視し、具体的な活動や体験の中で様々な気付きを得て、自立への基礎を養うことをねらいとするという生活科の前提となる教科の性格はそのまま踏襲している。

## Ⅲ. 生活科教育の課題

生活科の研究会で必ずと言ってよいほど話題になることがある。それは、「学習活動が体験だけで終わっている」や、「活動や体験を通して得られた気付きを質的に高める指導が十分に行われていない」、「表現によって活動や体験を振り返り、考えるといった指導が十分に行われていない」、「表現活動の出来映えを重視する学習活動・評価になりがちな傾向にある」などである。

このような問題の背景には、次のようなことがあると考えられる。

○思考と表現の一体化という低学年の特質を踏まえた指導が十分ではない。

○地域の人や社会、自然など身近な環境を生かした学習が十分でない。

○対象に直接かかわる活動や体験の中で生まれる知的な気付きを大切にしたい指導が十分ではない。

これらは、そのほとんどが支援者（指導者）としての教員側に問題があると言える。

児童が生き生きと主体的に活動して行く過程で、様々な気付きが生まれる。それは、学習対象に対して驚いたり、

感動したり、不思議に思ったりしている姿から見取ることができる。こうした気づきが、その後の活動をより広げたり、深めたりしていくきっかけとなっていくのである。さらに、こうした気づきは、児童が生活や学習に対してより意欲的に、自信をもって取り組むためにも重要である。

このような活動や体験の中で生まれる気づきが知的であることを見取り、その気づきを児童に自覚させるとともに、さらにそれを広げさせたり深めさせたりする教員の支援（指導）が必要なのである。

#### IV. 中道実践について

この実践は、平成28年度に取り組まれた実践であり、平成28年度奈良県教科等研究会生活科部会研究大会で発表されたものである。以下、概要を示していく。

##### (1) 研究主題

「社会とのかかわりの中で広がり深まる学習の創造」

本研究主題の下、児童同士が互いに育ち合うことに重点を置き、個々の学びをもとに、協同的な学びへと発展させていく学習や、児童の生活に活かすことのできる活動のあり方の研究を進めてきた。

本実践では、身近な「社会」と関わる活動を通して、自分もその「社会」の一員であることに気づき、自分でできることを自分なりの方法で取り組もうとする児童を育てることをめざしている。

##### (2) 研究の内容

###### ① 多様な学習活動の展開

王寺駅で働いている人の願いを聞き、王寺駅に親しみをもつようになった児童は「自分たちができることは何か。」という思いをもつ。そこで、どうすれば王寺駅を利用するすべての人に「マナーを守ろう」という気持ちをもってもらえるか考え、ポスターの掲示・王寺駅周辺の清掃活動・改札口に設置してある液晶モニターで啓発ムービーを流すことなど、多様な考え方を出し合い、取り組む。

###### ② 言葉を大切にしたコミュニケーションの充実

###### ・ 公共施設を支える人たちとの関わり

王寺駅の見学に行けるかどうかのアポイントメントを自分たちでとる。また、そこで働いている人と関わる中で、王寺駅に親しみを感じ、自分たちの町の駅に誇りをもつことができるようにする。

###### ・ 気づきの交流

「気付いたことを伝えよう」の活動では、まず、王寺駅見学で見つけた「駅で働いている人が大切にしていること」を付箋に書いて交流することにより、「見える化」を図る。

そして、グループごとにその付箋を分類し、分類した理由を伝え合う。グループで交流した後、学級全体で気づきを交流する。児童それぞれの見方によって異なる分類ができることや自分と同じ気づき、自分には見付けられなかった気づきなど、この交流によって様々な気づきをつなげていくことで、気づきの質が高まり、学びが深まるようにする。

## (3)単元の実際

## ①単元名

みんなでつかう 町のしせつ  
 ～よびかけよう 王寺えきのこと～

## ②単元のねらい

- ・ J R王寺駅やそこで働いている人々に関心をもち、ルールやマナーを守って、安全に気をつけて利用したり、すすんで関わろうとしたりしている。(生活への関心・意欲・態度)
- ・ J R王寺駅はみんなが使うものであることや、それを支えている人々がいることについて、自分の考えを工夫して表現している。(活動や体験についての思考・表現)
- ・ みんなが使う J R王寺駅とそこで働いている人々に親しみをもち、そこで働いている人の願いや施設の工夫に気付いている。(身近な環境や自分についての気付き)
- ・ 公共施設には、みんなが気持ちよく利用するためのルールやマナーがあることに気付いている。(身近な環境や自分についての気付き)

## ③単元について

- ・ 王寺町及び王寺南小学校校区について

王寺町は、江戸時代には大和川の舟運で栄え、近代以降は大阪・奈良間を結ぶ国道や鉄道が集中する交通の要衝として成長を続けている。なかでも鉄道は現在、J R 2線、近鉄 2線の4線が王寺に発着し、1日の乗降客が10万人を数える奈良県第一のターミナルを形成しており、まさに奈良県の西の玄関口となっている。大阪市中心市街へのアクセスが約20分という立地の良さから、豊かな自然に恵まれたベッドタウンとして発展を遂げてきている。

王寺南小学校は、昭和60年代に1400戸規模の新たな住宅地として開発された美しヶ丘ニュータウンの児童増により平成元年に開校した学校である。その後平成20年頃から600戸規模のスカイヒルズニュータウンも開発され、この二つのニュータウンのみを校区としている学校である。

- ・ 児童について

1学期に、校区にある店や施設、そして、そこで働いている人々と自分たちの生活とが関わっていることに気付くことをねらいとして町たんけんを行った。実際に商店や交番を訪ねた際に、事前に考えた質問以上に聞きたいことを見つけた児童が多くいた。インタビューカードの枠に入りきらないほど、どっさり書いたメモを持ち帰った児童も多くいた。クリーニングが終わった服にはタグがついていることや、薬局なのに薬以外のものを売っていることに気付き、「どうしてだろう。」と新たな疑問を見つけたり、関心が深まったりしたようである。このような活動の結果、児童はインタビューに行った店に家族と一緒に訪れたり、店の人を名前で呼ぶようになったりした。学習前はただ通り過ぎるだけの存在であった施設が、実際にそこで働いている人と言葉を交わす活動によって、児童にとって身近な存在となったようである。町たんけんの活動を通して、自分たちが住んでいる地域の施設に興味を持ち、実際にその施設を見学する学習を通して、新たな疑問を見つける力、目上の人に対する丁寧な話し方を身に付けることができた。

本校は王寺町の山手のニュータウンを校区としている。ほぼすべての家庭が自家用車を所有し、日常生活ではほとんど自家用車を利用した生活を送っている。そのため、バスやJ Rなどの公共交通機関を利用する機会が少ない



王寺南小学校

児童が多い。しかし、JR王寺駅は王寺町の発展に深く関わり、児童の家族の多くがJRを利用し、またその利便性を考慮して現在の住居へ転居してきていること。さらに、今後、児童たちも王寺駅から電車を利用する乗客の一人となることから、自分たちが住んでいる王寺町の多くの人々が利用する公共施設の学習としてJR王寺駅を取り上げることは有意義であると考えた。

・指導について

本単元は学習指導要領の内容(4)「公共物や公共施設の利用」をもとに構想した。

本単元では、導入において遠足でJRを利用した自分たちの行動を振り返らせるところから学習を進めていった。1年生の遠足でJRを利用した際、電車内でのマナーを注意されてしまったが、今年はどうだったのかを振り返った。「少し騒いでしまった。」「危ないことをしている人を見かけた。」「駅のホームで危ないよと言われてしまった。」などの振り返りをもとに、駅で働いている人や他の乗客は自分たちのそのような行動をどう思っているかを考えさせた。

そして、駅で働いている人は何を大切に思っているのかを想像させ、安全や気持ちよさ、時間通りなどのキーワードを出し合い、そのキーワードをもとに、実際に王寺駅で働いている人に話を聞きに行きたいという意欲をもたせていった。そして、自分たちが実際に王寺駅に電話をして見学の約束を取り付ける活動を行うことで、見学に対する関心をより深めることができると考えた。さらに、王寺駅で働いている人たちから聞いた願いや思いをもとに、まずは「自分たちがマナーを守って電車を利用できるようにしたい。」というマナーへの気付きを確かなものとしていった。さらに、見学によって芽生えた、自分たちの町にある「すばらしい王寺駅」だから利用するすべての人たちにマナーを守ってもらいたいという願いへと深めていった。そこで、王寺駅を利用するすべての人たちに駅で働いている人たちの願いや思いを伝え、マナーを守ってもらうためにはどうすればよいか、自分たちで考える活動に取り組んでいった。「啓発ポスターをつくって王寺駅に貼ってもらいたい」、「呼びかけ活動をしたい」、「王寺駅をきれいに掃除したい」など自分たちが王寺駅のためにできることを考えさせたいと考えた。

④本実践における特色ある学習活動

i 多様な学習活動の展開

本単元では、王寺駅で働いている人の願いを聞いた児童たちに「自分たちにできることは何かないか。」という思いをもたせたいと考えた。例えば、「お礼の手紙を書きたい。」「自分たち以外に王寺駅を使う人たちに知らせたい。」といった児童の思いをもとに、どうすれば王寺駅を利用するすべての人にマナーを守ろうという気持ちをもってもらえるか考えさせていった。

自分たちがポスターを作りそれを掲示してもらいたい、マナーを守るように駅前で呼びかけたい、王寺駅をきれいに使ってほしいので清掃活動をしたい、改札口の液晶画面で啓発ムービーを流したいなどの児童たちの考えが多様に出し合えるようにしていった。

## ii 付箋を活用した意見交流の充実

「気付いたことを伝えよう」の活動では、まず王寺駅見学で見つけた「駅で働いている人が大切にしていること」を付箋に書く。その際、第1次「遠足へ行ったね」の際に考えたキーワード（安全、時間通り、気持ちよさなど）をヒントにし、「（安全に乗り降りできるように）ホームに立って確認をしている」や「（上ってくる人と降りる人がぶつからないように）階段にはマークが描いてある」などの気付きを書いていった。

そして、第1次のキーワードをもとにして、前時に書いた付箋を分類した。その際、4、5人のグループに分かれて、どうして自分の付箋をそのキーワードに分類したのかを伝え合わせ、同じ気付きでも見方によっては違う分類をしていることに気付かせた。また、付箋を用いて同じ気付きを近くに集めることで、友達と同じ気付きがあることや、自分には見つけられなかった友達の気付きがあることにも気付かせていった。そして、学級全体で気付きを交流し、駅で働いている人は乗客が安全に快適に駅を利用できるように心がけていることに気付かせていった。学級全体で気付きを交流した後に「見つけたよカード」を書かせていった。



## ⑤実践の概要

## i 【教えて 王寺駅のこと】

秋の遠足で公共機関・施設を利用すること知らせ、その事前指導として、公共機関や公共施設で働いている人を見付けるよう声をかけておいた。事後指導で、どのような人を見つけたのか尋ねると駅員さんがあがった。

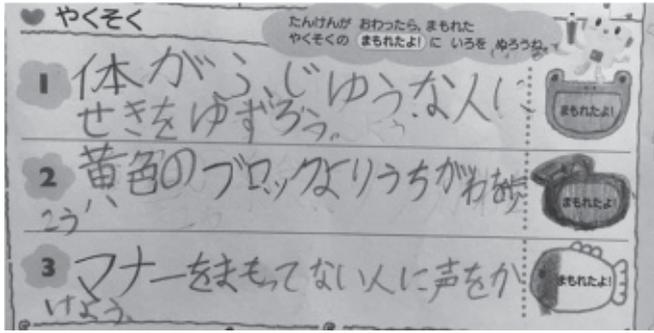
そこで、町探検の時のように駅で働いている人に話を聞くため、自分たちで王寺駅に電話をして、見学に行ってもよいかアポイントメントをとる活動を行った。代表の児童が実際に電話をしている様子をスピーカーフォンで学年全員が聞いていた。見学を受け入れてくれるという返事をいただき、電話を切った瞬間、ガッツポーズをしたり、ほっとため息をついたり、飛び跳ねて喜んだりする児童の姿があった。

## ii 【王寺駅の見学】

見学後、児童が書いた付箋は300枚を超えた。「王寺駅で見付けたこと、分かったことをみんなに伝えたい」という児童の強い思いを感じた。



iii 【でん車で GO!】



畠田駅から王寺駅まで、自分たちで電車に乗って出かけるという活動を計画した。この活動では、駅員さんに聞いたことを思い出しながら、自分たちでマナーを考えた。そして、王寺駅で駅員さんから教えてもらったように、一人で切符を購入し、グループで考えたマナーを守りながら畠田駅から王寺駅まで電車に乗った。

自分たちが考えたマナーを守ろうという気持ちはあったが、中には実際に行うことができなかったものもあった。マナーを守ることを呼びかけようとしても、知らない大人に直接声をかけるのはとても難しいことだと気付くことができた。

iv 【よびかけよう 王寺駅のこと】

自分たちの町の王寺駅のために、自分たちができることを考えていった。チラシを配るやインターネットニュースに投稿するなど様々な案が出てきた。自分たちが実際に声をかけることは難しいと実感した児童たちは、マナーを守るこ



ポスターってこんなに大きいんだね！  
(全紙サイズの画用紙)



誰か赤ちゃんの人形持っていないかな？ 赤ちゃんを抱っこしている方が伝わりやすくない？

とを乗客に呼びかけるためにどうしたらよいかということを考えていた。そんな児童たちからは、ポスターづくりやCMづくりなどのアイデア

アが出てきた。

王寺駅の協力のもと、マナーを守ることを呼びかけるポスターと改札口の液晶画面に流すCM作りに取り組んだ。「駅員さんの願いや思いを自分たちが利用者に伝えたい」という強い思いを胸に、意欲的に取り組むことができた。

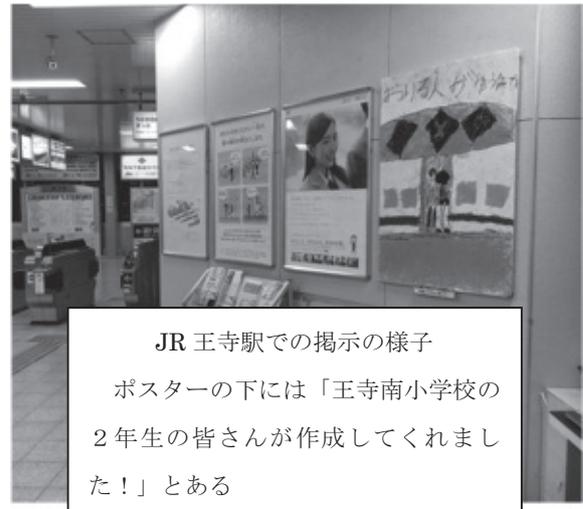
⑥成果と課題

i 成果

自分たちで見学の約束を取り付け、王寺駅に見学に行き、自分たちの町の王寺駅という親しみをもつことができた。また、そこで働いている人と直接関わることで、王寺駅ではたらいっている人の願いや思いに気付き、自分

たちを含むすべての利用者が、互いに気持ちよく利用できる王寺駅にしたいという強い思いももつことができた。

自分たちがマナーを守って安全に電車に乗れるかどうかを実際に確かめる活動を行うことにより、自分たちの理想と実際にできることとのギャップに気付くことができた。その結果、王寺駅のために自分たちが本当にできることを自分たちで考え、実行したことにより、単なる利用者という立場を越えて、自分自身の力でよりよい生活をつくりだそうとする態度につながったと考える。また、自分たちが制作したCMやポスターを見るために王寺駅を利用した児童もおり、こうした行動からも、自分たちの町の王寺駅に対しての愛着や誇りにつながっていくと考える。



## ii 課題

【教えて 王寺えきのこと】の学習場面で分類した付箋の中には、同じ「親切」というキーワードでも、自分を含む利用者への親切（お年寄りのために改札口に駅員さんが立っているなど）もあれば、駅員さんへの親切（運転手さんは交代で休む時間があるなど）もあった。キーワードの内容を明らかにしたり、対象を明確にしたりしてから、それぞれの対象ごとに分類した方が分かりやすくなったと考える。

また、分類した付箋の内容を【でん車で GO!】の活動場面で、電車に乗る際に確認すれば、実際に自分がその内容を目にすることができたので、より一層気付きを深めることができたのではないかと考える。<sup>5)</sup>

## V. 生活科教育の課題解決に向けて

先にも述べたように、生活科は「自立への基礎を養う」ことを目標としている教科である。生活科は学校や家庭、地域といった場で学習を行い、体験を通して人や事物などとさまざまに会い、その出会いから気付き、その気付きを友達や学級集団の中で協同的に学び、生活の知恵を学んでいくのである。そして、その学習の過程で、さまざまな学習方法（学習の仕方）を学んだり、出会いから得た気付きを構造化したりしていくのである。このことを通して三つの自立への基礎を育てていくのである。

ただ、生活科の学習を進める際に見られる課題には、支援者（指導者）である教員の側に原因があることも多いことから、教員の支援（指導）の観点からの課題解決への方策を考えてみたい。

### (1)「学習内容を構造的にとらえる力」を高める

支援者（指導者）である教員は、生活科の授業を構想する際に、単元の目標を明確にし、その単元で児童に獲得させたい基礎・基本と、それを身に付ける上で欠かせない基本的な力、例えば、対象にかかわる力、持続的・試行的な態度などを明らかにして、それらを構造的に明らかになるような手立てが必要になってくる。それは、「どのような対象とどのように出会わせて」「何に気付かせたり、考えさせたり、表現させたりするのか」など、児童の学習のプロセスが明らかにしていくことにつながると考える。

その手立てとして、生活科の特徴の一つでもある単元の構想図を工夫することが大切であると考えられる。

本実践において、中道教諭は学習活動を示した後、予想される児童の反応を詳細に示すという構想図を作成して

いる。一見、学習方法や支援の手立てなどが書かれていないため、工夫が見られないようにも思える。しかし、本実践において、中道教諭は協同的な学習を重視しながら、児童の気付きをいかに構造化し、それを共有していく過程を通して、児童一人一人の気付きの広がりや深まりの実現を重視するということを大切にしている。児童の気付きや見方・考え方を児童の実態に即して多様に構想している構想図は、まさにその考えに沿ったものであると言える。

さらに、王寺駅へ自分たちが作ったポスターやCMを見に行く児童が現れるなど「できるようになった私」「わかるようになった私」を児童たちにしっかり自覚させ、児童たちの「セルフエスティーム（「自己肯定感」「自尊感情」）」と「生活者として生きる自信」を育てている。

## (2)「教材を開発する力」を高める

まず、教材を開発する際に、学校、家庭、地域といった児童の生活の場から教材を見いだしていくことが必要である。中道実践においては、自分たちの町の特徴を形成している交通の要であり、その駅が存在することから自分たちが生活するニュータウンが生まれ、学校が設置されたことにもつながっているJR王寺駅を教材として取り上げている。

そして、教材を設定するだけではよい教材とはなり得ない。教材には何が必要なのか。その要件を明確にし、それらを踏まえ、様々な工夫・開発することが必要になってくる。中道教諭は、JR王寺駅の教材化を図るにあたって、次の3つの視点を大切にしている。

- ①児童にとって感動的であり、興味・関心をもてるものであり、何より達成感や成就感を味わい、そのことが自己肯定感へとつながっていく教材であること。
- ②生活科の基礎・基本を大切にされた教材であること。これは、学習指導要領の目標、内容との関連性を吟味することにつながるものである。
- ③学習対象である人・社会・自然に働きかけ、ふれあったり、交流したり、参加したりするなどの主体的な活動が可能な教材であること。

具体的には、①の視点に関しては、児童自身の体験、駅員とのかかわりから生まれた「駅や電車を安全に気持ちよく利用するためのマナー」に関する気付きを利用者に伝えていくための方法を話し合い、ポスターやCMを考え、作成していくという活動を通して、児童の興味・関心は高まり、実現に向けて意欲的に考え、話し合い、実現へと向かい、達成感や成就感を味わっている。これは、まさしく自己肯定感を育てることにつながっていると言える。

②の視点に関しては、本単元は目標(1)や内容(4)に示されている公共施設などのかかわりに関心を持ち、それを支えている人々がいることがわかり、それらを大切に、安全に気をつけて正しく利用することや、地域の良さに気付き愛着をもつこと、そして社会の一員として自分の行動の仕方について考え、自分が社会のためにできることを考え、実行することを踏まえて単元を構想している。その結果、生活者としての基礎的な能力の育成につながっている。

③の視点に関しては、中道教諭は児童の主体的な活動の実現ということをとっても重視している。それは、本実践で「④本実践における特色ある学習活動」と示されている「i多様な学習活動の展開」を見れば明らかである。この「i多様な学習活動の展開」で中道教諭は「王寺駅で働いている人の願いを聞いた児童たちに『自分たちにできることは何かないか。』という思いをもたせたいと考えた。」という考えのもと、JR王寺駅の見学のアポイントメントを取ることや駅の見学、そして気付いたことを実践するための乗車体験、そして乗車体験の気付きから始まる

ポスターを作りと改札口の液晶画面を活用したCM作りへと活動が進んでいく。どの活動も児童の思いや願い、気付きから始まっている。そして、中道教諭が児童の背中を押したり、考えを引き出したり、その考えを交流させたりという支援を行うことで、児童は具体的な活動へと進んでいっている。とてもダイナミックで、一見すると2年生の発達段階からすると難しい活動であるように見えるが、児童の実態をしっかりと見極め、周到に計画された中での実践であるので、児童たちは終始意欲的に活動に取り組んでいた。

特に注目すべきは、中道教諭がJR王寺駅と入念な打ち合わせをして、児童の活動をサポートしているということである。児童が固唾をのんで見守る中で行われた見学のアポイントメントや駅構内に半年間にもわたってシリーズとして掲示してもらっているポスター、駅改札口の液晶モニターに児童作成のマナー啓発コマーシャルを放映してもらえるようにしたことなど、これらは学習を進めるに当たって、中道教諭が児童主体の学習の実現をめざして努力してきたことの表れであると思う。何よりも学習の対象となったJR王寺駅がこの学習の意味や価値を十分に理解し、協力していただけたということが本実践の素晴らしさであると考えられる。

## VI. 終わりに

今回の学習指導要領の改訂方針を示した中央教育審議会答申で、生活科の「学習・指導の改善充実や教育環境の充実等」について、「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、「主体的な学びの視点」からは児童の生活圏である学校、家庭、地域を学習の対象や場とし、対象と直接関わる活動を行うことなどに加えて、表現を行い伝え合う活動の充実などが提起されている。「対話的な学びの視点」では、身の回りの様々な人と関わりながら活動する中で、双方向性のある活動の重要性が提起されている。「深い学びの視点」からは、気付いたことを基に考え、新たな気付きを生みだし、関係的な気付きを獲得することが深い学びにつながる<sup>6)</sup>と提起されている。

このように、生活科においても「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取組を一層充実させることが求められている。その際、忘れてはならないことは、こうした学習を充実させるために学校内外の様々な人的な協力、交流の必要性が増してくるということである。このことは、今後、生活科の教材開発を行ううえで忘れてはならないことであると考えられる。

「教育する」を意味する英語は‘edcate’である。この‘edcate’は「引き出す」という意味をもっている。児童一人一人の思いや願いに迫る活動を重ねていく中で、児童一人一人が内に秘めている興味・関心、意欲、知的好奇心、探究心、自己表現力など、児童の内なる力を引き出せる学習を成立させるための支援（指導）を行っていかなくてはならないと考える。

## 引用・参考文献 (References)

- 1) 中央教育審議会答申 (1971) 『今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について (答申)』
- 2) 文部科学省 『小学校学習指導要領』 (平成20年3月告示) (2008)
- 3) 「教育課程審議会答申『幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について (答申)』」 (1987年)
- 4) 文部科学省 『小学校学習指導要領』 (平成29年告示) (2017)
- 5) 中道奈都美 (2016) 『みんなであつかう町のしせつ～よびかけよう王寺えきのこと～』平成28年度奈良県教科等研究会生活科部会研究大会社会部会発表
- 6) 中央教育審議会答申 (2016) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び

必要な方策について（答申）』

植松利晴（2014）『学ぶことへの意欲を高める生活科教育の在り方』平成18年度奈良県立教育研究所研究集録

木村吉彦（2003）『生活科の理論と実際』（『子どもの未来を拓く教育の創造』天野正輝編所収）文化書房博文社